

『和歌初学抄』の古筆切

日比野 浩 信

藤原清輔の著述『和歌初学抄』は、同じく清輔らの手によって仁安年間に成った『和歌現在書目録』に既にその名が見えており、それ以前の成立であろうが、現存本は、奥書に「嘉応元年七月日依殿下仰抄出之」とあることから知られる通り、清輔六十六才の時に抄出されたものであるらしい。その序文に、

歌をよまむにはまづ題をよく思ひとき心うべし。花をよまむには花の面白く覚えむずる事、月を詠ぜむには月のあかず見ゆる心を思ひつゞけてをかしく取りなして、古き詞にやさしからむを選びてなびやかにつゞくべき也。

とあり、清輔の詠作態度を考える上で注意されるが、本書の名称にも示される通り、初学者に向けての心得であるのとらえておくべきであろう。中世以降、和歌の理念

を記し、秀歌を列挙するといった、抽象的な歌学書が多くみられる中、実詠歌からの歌句を摘出することによって体系付けられた『和歌初学抄』は、至便な書として、初学者に限らず広く用いられていたであろう。

六条家の歌学書は、さほど多く現存してはいえないが、その流布を知る手掛かりとして古筆切が考えられ、『和歌初学抄』は、平安時代に成った歌学書としては、最も多くの古筆切が知られている。

『和歌初学抄』の伝本については、久曾神昇氏^[1]、川上新一郎氏^[2]のご研究があり、何ら付け加える所はないが、管見に入った『和歌初学抄』の古筆切を集成し、その本文にも若干の検討を試みたい。但し、複製本などによって、既に知られている切に関しては、その本文は一々あげないこととする。

比較に用いる『和歌初学抄』本文は、「日本歌学大系」所収本に拠り、必要に応じて「平安時代歌論集」（天理図書館善本叢書）所収本、志香須賀文庫蔵（室町期書写本）、天和四年版本（歌学大系校合本）を参照することとする。

① 伝中臣祐春筆四半切

久曾神氏によって、

鎌倉時代の古鈔本としては管見の範囲では、天理図書館蔵二本の他には伝中臣祐春筆四半切、伝二條為氏筆四半切などが知られるにすぎない。
と紹介されている。志香須賀文庫の御所蔵で二十四・六×十一・七センチ。本文は次の通り。（一）は朱書

(万) な、なみやひらのやまかせうみふけは

つりするあまのそてかへりみゆ

(万) おもへはそわれてもつきのいてつらん

こ、らたらちのさねのなかより

(後撰) なつのよはあふなのみしてしきたへの

ちりはらふまにあけそしにける

(万) たまたれのあみめのまよりふく風の

同さむくはそへていれんおもひを

これはおほゆるはかりなりのこりはひき

（一首目始めの「な」に朱で見せ消ち。四首目の集付「万」「同」の上に合点らしき墨書あり。）

「次詞」の後半の例歌と、最後の説明文の大半である。大系所収本文と比較するに、一首目「そでかえるみゆ」が切では「そでかへりみゆ」とあり、また最終行、大系では「可引考也」と漢文表記されているが、切では和文表記としてゐるなどの他は、同じである。ただ、四首目の集付には誤りがある。

② 伝二條為氏筆四半切

①に同じく久曾神氏が紹介されている。やはり、志香須賀文庫蔵。二十三・三×六・二センチ。本文は次の通り。

おほとものみつのはまへをうちさらし

よせくるなみのゆくへしらすも

すみよしのなこのはまへにむまたて、

たまひろひしはつゆわすられす

とよくにのきくのなかはまゆきくらし

「両所ヲ詠歌」の「浜」のうちの二首目、三首目及び、四首目の上句。大系所収本文と比較するに、最後の歌の第三句「ゆきくらみ」が、切では「ゆきくらし」とし、また、切には集付がない。他に大系所収本との異同はみられない。

①②とも、鎌倉期の書写にかかる切として注意すべきである。

③ 伝西行筆切

④ 伝三条公忠筆切

この二種は、『和歌初学抄』の古筆切のなかでは、いち早く知られた切のようである。便宜上、同時に見ていることとしたい。

③は「永青文庫叢刊手鑑」所収の一葉で、「所名」の「神付宮」の後半部及び「雑」の初めの部分であり、④は「古筆切集 浄照坊藏」所収の一葉で、同じく「所名」の「野」の後半に近い部分である。伊井春樹氏が、

……散文としては歌論書も多い。いくつかを示すと、阿仏尼の『僻案抄』（秋田切）、西行の『和歌初学抄』、宝密の『奥義抄』……

と記しておられるのは、③の切を指すのであろう。また、藤井隆氏、田中登氏「統国文学古筆切入門」や、「古筆学大成」にも、この両種についての記述がある。

各々の所収手鑑の解説によれば、③は鎌倉時代の書写で、十五・二×十四・三センチ。④は室町時代の書写で、十五・×十四・二センチとされている。しかし、「古筆学大成」の解題には、

……『大阪大学中世文学資料叢書Ⅰ』（古筆切集 浄照坊藏）昭和六十三年 和泉書院刊）に、「伝三条公忠筆 和歌初学抄切」の一葉（十三世紀後半の書写）が収められている。さらにまた、永青文庫蔵 古筆手鑑「墨叢」に、「伝西行筆 和歌初学抄切」（十四世紀後半の書写）を所収する。

とあり、両種の書写年代に関しては、全く正反対ともいうべき見解が示されている。因に「統国文学古筆切入門」では、これら二種の書写年代については言及しておられない。結局、二種ともに、鎌倉時代書写、室町時代書写とみる両説が存することになる。

この二葉、筆跡がよく似ている（同筆か否かの断定は避ける）上、書式も類似する。大系所収本文では小書きされている国名が、二葉ともに一行を費やしている（天理本、志香須賀本には、国名を記さない）。文字についても、「和」の偏と旁を逆にする点、一致している。また、現存箇所も比較的近接している。これらの点から、あるいはこの二葉は、同種の切、つまりツレである可能性をも有しているのでなからうか。

しかし、稿者のごとき文献の扱いに疎い者が写真を見ただけで判断することなど全くできず、また、④では地名の横に「やまと」「かうち」などの振り仮名を付して

いるという違いもあるため、前述解説で、二種の関連について触れておられないのは、当然別種であると判断されてのことであろうか。

二種とも、本文は大系所収本文に比して、文字の異同などはあるが、取り立てて大きく異なるという訳ではない。しかし、前述のように、国名を大きく扱う書式は流布本には見られないものであり、注意すべきであろう。

⑤ 冷泉為相筆六半切

「続国文学古筆切入門」所収。解題によれば、十五×十センチ、鎌倉末から南北朝ころの書写。「万葉集所名」の「江」から「浦」にかけての一葉。本文は、大系所収本と比べると、わずかながら異同がある。大系本に「たつのほそえツタノホソエトモ」とあるが、当該切では「たつのほそえたつのほそえともいふ」のようにあり、地名とその異名とされる小書きが逆になっている。この箇所について、天理本では「たつのほそえ つたのほそえ」として、また志香須賀本においても「つたのほそえ たつのほそえ」というように、順序は入れ替わってはいるが、二所ともそれぞれ記されているのである。「万葉集」には、「つたのほそえ」はあるが、「たつのほそえ」は見当た

らないところから、四本の中では、当該切の本文が、誤りは認められるものの、より合理的であると言えるかも知れないが、一概に言い切れる問題でもなさそうである。というのは、同じく清輔の手に成る『奥義抄』では「たつのほそえ」のみが「出万葉集所名」の項に見出され、「つたのほそえ」は記されていないのである。この箇所については『奥義抄』の現存諸本間に異同はない。とすれば、清輔は、少なくとも『奥義抄』執筆当時「たつのほそえ」を「出万葉集所名」と考えていたことになり、『和歌初学抄』を著した頃には「たつのほそえ」も「たつのほそえ」も、なんらかの形式で記されていることから、「たつのほそえ」を「出万葉集所名」として容認した上で、当然あってもおかしくはない「つたのほそえ」を追加したことになるであろうか。これについては稿を改めて述べる予定である。

尚、藤井氏は、この切に接続するもう一葉を所蔵しておられる由、解説に明記しておられるが、氏のご厚意によりその複写をお示しいただくことができた。その本文を次にあげさせていただきます。

ひさかのうら しほつすかうら

のさかのうら かさはやのうら

かつしかのうら ふせのうら

かさなきのうら いはらのきよみせきのみほのうら

かみしまのいそまのうら

すみよしのあさかのうら

すみよしのしきつのうら

すかしまのなつみのうら

濱

なこのはま きくのなかはま

さかみちのよろきのはま みつのはま

みをさきのこぬみのはま いそさきとも

崎

みをかさき としまのさき

所名の出入り、順序ともに大系所収本文とはかなりの異同があるが、天理本、志香須賀本とは、小異あるものの、大体類似している。川上氏によれば、歌学大系の底本である書陵部蔵本はⅡ類本、天理本はⅠ類本として分類されており、私見によれば、天和四年版本はⅡ類、志香須賀本はⅠ類に当てはめて分類できようである。よって、当該本はⅠ類本として分類できそうである。

⑥ 伝藤原清輔筆切

「古筆学大成」所収。解説によれば、十三世紀後半頃の書写。二十二・五×十四・五センチ。著者清輔を伝称

筆者とするが、残念ながら自筆などではなく、時代が下るようである。「似物」の一部。大系所収本文と比較するに、「霞は玉 シラケ」の「シラケ」が、当該切にはない。このことは、天理本と志香須賀本と一致する。すると当該切は、Ⅰ類本である可能性が生じることになるが、いかんせん一葉のみのことでもあり、微細な異同でもあり、明らかな分類の基準となる箇所でもないのので、明言することはできない。

また、書式がそれぞれに異なっている。

(切)

花 にしき 雲 ゆき 浪

(天理本)

花ハ

にしき くも ゆき ゆふ なみ

(志香須賀本)

花は にしき くも ゆふ ゆき なみ

(歌学大系)

花は錦 雲 ゆき ユフ 浪

(天和版本)

花は錦雲雪ゆふ波

のようになっている。また当該切、天理本、大系本では、和歌を項目より二〜三字下げ、志香須賀本は、項目と和

歌を揃えて記し、天和版本では和歌が一字上げとなつて
いる。そもそもあるべき書式としては、項目の語とその
「似物」は明らかに区別されているべきであり、和歌は
その例歌にすぎないことを考えると、小書き、もしくは
改行で項目と似物を区別し、例歌を下げて記すような、
当該切や天理本の書式が理想的であると言えるのではな
かろうか。

⑦ 伝二条為定筆切

田中登氏御所蔵の一片で、ご厚意によりその写真をお
示しいただいた。ご教示いただいたところによると、十
三・七×十四・三サンチで、鎌倉末期の書写であろうと
のことである。所々に朱で声点を付す。「古歌詞」のう
ち『後拾遺集』の一部である。本文は以下の通り。

なみのしからみ えたやもり
かをとめて そらなつかしく
いもかいゑち ならの葉そよく
ことしも さよふかき
あさひくいと はなのひもとく
あさちふのあきのゆふくれ
すきのむらたち をのへのしか
たちともみえぬゆふくり

した葉やさむくちりぬらん
のはらのつゆ をちかた人

大系所収本文とは大きく異なる。しかし、天理本、志香
須賀本などは、ほぼ一致しており、川上氏の系統分類
のI類本に分類できる本文であると言えそうである。た
だ「おぎのはにひとだのめなるかせ」が当該切には無い
が、恐らくは単なる誤脱と考えてよいであろう。

書写年時の古い、系統の明らかなか切として注意すべき
であろう。

管見に入った『和歌初学抄』の七種の古筆切について
概観した。鎌倉期の書写にかかる『和歌初学抄』は、伝
本三本と合わせると九種（少なく見積もっても六種）知
られるわけである。『和歌初学抄』の流布に関しては、
藤井氏が、

藤原清輔の歌学書としては、奥義抄と袋草子の方が
評価も高く、重要なものとされているが、両書とも
古筆切らしい古筆切は全く知られない（奥義抄に室
町のものがある程度）。然るに和歌初学抄は既に三
種知られるわけで、中世には初学抄の方がやはり一
般的で流布したことを物語るものであろう。

と述べておられる通りであらうし、この御説を補強する

ことができたように思う（但し、『奥義抄』も、鎌倉期のものが、伝本と古筆切を合わせると四〜五種知られ、その点、注意を要する）。

伝本や古筆切の現存状況から考えると、衰退していったとされる清輔（六条家）の歌学も、鎌倉時代にも少なからず流布していたことが認められるわけであり、その享受を考える際、直接的な他文献への引用の度合いからだけではとらえきれなかった事実がうかがわれるように思われ、今後は考慮していきたいと考えている。

稿者の文献、古筆切の扱いが未熟であり、不十分な点が多いことを恥じつつも、敢えて卑見を述べた。今後も、古筆切をも資料として活用していきたいと考えている。御教示、御叱正を乞う次第である。

貴重な資料をご提示下さった、久曾神氏、藤井氏、田中氏に衷心御礼申し上げます。

注

- (1) 「日本歌学大系」第一巻解題など
- (2) 「和歌初学抄」伝本考（斯道文庫論集 第十九輯）
- (3) 天理図書館善本叢書「平安時代歌論集」解題
- (4) 天理図書館蔵伝藤原為家筆本、同伝藤原為氏筆本、

中央大学図書館蔵伝藤原為氏筆本の三本が鎌倉期の書写本として知られている。

(5) 「続国文学古筆切入門」解題

【奥義抄】の古筆切については、平成七年六月、和歌文学会関東例会において口頭発表した。近く活字化する予定。

（平成七年博士後期課程単位修得退学・研究生）